

令和6年3月29日

軽井沢町議会
議長 遠山 隆雄 様

押 金 洋 仁

視 察 研 修 報 告 書

1. 視察日程

令和6年1月29日（月）

2. 視察先及び目的

- ・石坂産業 株式会社 「三富（さんとめ）今昔村」
- ・埼玉県三芳町役場

落ち葉を利用した地域資源循環の取り組み

3. 視察内容

(1) 三富今昔村の視察 （施設見学・店舗見学）

説明者：石坂産業株式会社 三富今昔村事業推進部 矢口 瞳氏

(2) 武蔵野の落ち葉堆肥農法及び世界農業遺産についての研修

説明者：三芳町役場 観光産業課長 三浦 康晴氏

4. 同行者 葉乃畑合同会社 山岸 征男氏

5. 考察

環境意識の高まりに伴って、当町軽井沢町でも循環型農業、ゴミの減量化を始めとした3R、子どもたちへの安全安心な食物の提供等について行政に対策を求める声は一定数の大きさになっている。また町内では落ち葉の回収、分別、焼却にかかるコストを無駄にせずに生かそうという取り組みが始まっているが、採算ベースとして成り立っているとは言い難く、取り組みに対する理解や認知についての波及も限定的である。他方環境基本計画も策定から実行ステージという局面に差し掛かる現在、まずは実際の先行事例を間近に見ることに一定の有意性はあると思われる。

最初の訪問地、三富今昔村は産業廃棄物処分を主業とする石坂産業の運営する施設である。事業推進本部所属の矢口氏に園内を案内していただき、設置目的等について

伺った。きっかけは所沢周辺でかつて大変な社会問題となったダイオキシン問題、そして同社社長である石坂典子氏の、単なる「産廃屋」からの脱却を目指す社是に端を発しているようである。2002年ごろから工場の周辺の農家と契約し、荒れていた土地を借りて手入れを始め、現在のような状態になるまで10年ほどかかったとのことである。かつての武蔵野を象徴するような雑木林として整備し始めたのち、生きもののかくす環境に着目して森林環境を評価する手法、JHEP認証(ハビタット認証)の最高ランクを取得、2012年には場内で環境教育を始め、2016年には一般にも開放した。さらに環境教育リーダー研修の開催や山梨県キープ協会、栃木県ツインリンクもてぎとの相互協力を進めている。年間で一般入場者4万人、見学者1万人を受けいれている一方、1億5~6千万の経費がかかっているとのことである。場内の雑木林エリアには落ち葉堆肥場が複数設けられており、この堆肥を使って野菜作りをし、収穫物を自社レストランで提供している。雑木林は草花、鳥類など多様な生き物の生息場所になっているほか、ビートルベット(カブトムシの幼虫の棲家)、落ち葉プール、アーシングセラピー(裸足で歩き土の感触を体験するコース)など様々な施設が用意されており、地域の子供達の体験場所となっている。

産業廃棄物処理という循環や環境に向き合う生業だからこそ気づけたこと、また産廃処理について回るネガティブなイメージを変え社員に誇りを持たせたいと思ったこと、武蔵野という土地に古くから伝わる雑木林という資源、これら複数の要因が揃ったことでこうした施設の整備に結びついていったと思われる。

続いての訪問場所、三芳町役場では武蔵野の落ち葉堆肥農法と世界農業遺産について、その意義と取り組み内容を伺った。関東ローム層に覆われたこの地域の農家には古くから広葉樹で構成された「平地林」と呼ばれる人工林が畑に隣接しており、この広葉樹の落ち葉を堆肥として漉き込みながら土づくりをしてきた。落ち葉堆肥農法はこの地で360年間続いてきた手法であり現在町内には36軒の農家が営農、主な作物はサツマイモ、ニンジン、葉物野菜とのことである。首都圏の一般住民も含めた「落ち葉サポーター」が参加しての落ち葉掃きイベントや小学生を対象とした農業塾を開催し、伝統と文化の継承に取り組んでいる。武蔵野という地域の歴史や農法、それらを生かしての農産物の安定的な生産、景観や生物多様性を育むシステムが長く持続していることが世界農業遺産の認定へと繋がったという。

武蔵野の雑木林、その葉が土に漉き込まれることで貧栄養の土地を豊かにし、農作物の持続的な生産につなげている事例であったが、三芳町の農家が完全な有機農業、無農薬農家であるかというところではないとのことであった。いずれにしても、地域にもともと備わった資源を上手に使っていく手法には無理が無く、だからこそ持続性があるのだと感じる。当町の農地は水位の高さ等の点で条件は異なるが、同じ地域資

源としての落ち葉を土づくりに利用しながら持続的に、また農薬に依存せずに農作物を生産していくことは環境意識が高まるだろう今後にとって望ましい手法ではないだろうか。